

地球環境時代を生きる哲学

—クリシュナムルティの思想に依拠して—

A Philosophy of Holistic Environmental Management

石 井 薫

はじめに

- 1 恐怖なしに生きる—人類の究極的課題—
 - 2 生きることと死ぬこと
 - 3 全的な意識変容
 - 4 思考と時間と意識を超えられるか—哲学の根源的問題—
- 結びに—地球環境時代を生きる哲学—

はじめに

2011年3月の東日本大震災によってもたらされた危機的な状況に直面して、私たちはどう生きたらいいのか、本稿では、私たちの生きる哲学について考察する。テレビや新聞などマスコミに限らず、ほとんどの人々は、外面的な対応ばかりに目を向けている。しかし今、個々人の内面的な対応にも眼を向ける必要があることを強調したい。

外面的な対応だけでなく、内面的な意識変容の必要性をクリシュナムルティは訴えているが、このクリシュナムルティの思想は、まさに今日の危機的な状況を「生きる哲学」というにふさわしい。私は前に、クリシュナムルティの思想は人類にとっての貴重なメッセージだとして紹介したことがある（石井, 2010）。たとえば著名な医師のラリー・ドッシーも、「宇宙は友好的でしょうか？」というアインシュタインの発言に対して、「きっとそうです。なぜなら、それはわれわれにクリシュナムルティを与えてくれたのですから」と述べたという（大野, 337 頁）。

それはともかく、以下では、できるだけクリシュナムルティの言葉を忠実に紹介しながら、私たちの生きる哲学を求めていこう。

1 恐怖なしに生きる—人類の究極的課題—

私たちは幸福に生きたいと思っているが、それは不安や心配なしに、すなわち「恐怖なしに生きる」ことであろう。しかしながら私たちは、「恐怖」そのものを直接見つめることはしてこなかった。これに関して、クリシュナムルティは、次のようにいう。

「人類は地球上に何百万年も生存しつづけ、テクノロジーを駆使するほど知的なのに、この恐怖というきわめて複雑な問題から解放されるために、なぜその知性をそそいでこなかったのでしょうか。恐怖は戦争や殺しあいの原因のひとつかもしれないというのに…。世界中のさまざまな宗教もグルも救世主も理想も、いまだ恐怖を解決していません。したがって、どんなに崇高であろうと、また宣伝によりどれほど人々に浸透していようと、外的な機関や力によってはとても恐怖の問題を解決しえないということは明らかです」（クリシュナムルティ, 1997, 11 頁）。

クリシュナムルティは、私たちが最初に自問すべきことは「恐怖とは何か」とか、「それはどのように起こるのか」ということであって、「恐怖」という言葉自体が何を意味するのか、つまり私は何を恐れているのかではなくて、恐怖の本質とは何かということに自分に問うことだと述べている。クリシュナムルティは、確実なことから不確実なことへの心の動きを恐怖と呼ぶとして、思考が恐怖を生み出す張本人で、恐怖があるのはそこに思考が入り込んだときだけだと指摘している（クリシュナムルティ、1997、18～20頁）。さらに思考が恐怖を生むが、思考は快楽をも培うので、恐怖を理解するには快楽のことも理解しなければならず、快楽のコインの裏側が恐怖だとも指摘している（クリシュナムルティ、1997、109～108頁）。

ここでクリシュナムルティのいう「思考」は、「時間」や「意識」が絡み、深い意味がある。たとえば、それは、「時間はつねに過去と未来に属する。そして時間の死が現在における生なのである。不滅なのは意識の中の生ではなく、この生なのだ。時間は意識の中の思考であり、意識はその枠組の中で活動する。はりめぐらされた思考と感情の網の中には、つねに恐怖と悲しみがある。悲しみの終焉こそ時間の終焉なのだ」（クリシュナムルティ、1997、186頁）という指摘からも窺えよう。

次に恐怖と言葉との関わりをみてみよう。私たちは、「神」「共産主義」「天国・地獄」「孤独」「妻」「家族」といった言葉に支配されており、言葉に支配されている精神は決して恐怖から自由になれないと、クリシュナムルティはいう。すなわち、精神は言葉という障害物がない時、解釈や正当化や非難がない時に注意深くいられるのであり、そのような精神はそれ自身を照らしだす光となり、そのような光である精神だけが恐怖をもたないのだという（クリシュナムルティ、1997、77～78頁）。ここで言葉と事実・現行のもの（the actual）とのちがいに気をつける必要がある。「山」という言葉は、山でなく、「K（クリシュナムルティ）」という言葉はKでなく、またあなたの名は、あなたでないと認識することは重要である（クリシュナムルティ、2010C、281～282頁）。なぜならひとつの言葉が、記憶や連想によって人に恐怖や快楽をもたらすため、私たちは言葉の奴隷になっているからで、何かを完全に調べたり見たりするには、言葉から自由でなければならないという（クリシュナムルティ、1997、82頁）。このことを理解するには、次が参考になろう。

「言葉から自由になって、それに重きを置き過ぎないこと。言葉はそれが伝えようとするその当のものではなく、その当のものは決して言葉ではないと見てとること。言葉の持つ響きに囚われないで、注意し理解して言葉を使うこと。言葉に敏感でいて、言葉に押し潰されないこと。言葉の壁を破って、事実をよく考えること。言葉の毒を避けて、言葉の美を感じる。言葉と一体化することは全て退けて、言葉を吟味すること。というのは、言葉が罠であり、誘惑だからです。それらはシンボルであって、真実ではありません。怠惰な精神や無思慮な精神や、欺瞞的な精神にとっては、言葉の弾幕が隠れ蓑になります。言葉への隷属は、行動のように見えても、行動とはいえない行動の始まりです。シンボルに囚われた精神は遠くへ行けません。あらゆる言葉や思考が精神を形作ります。あらゆる思考が理解されていないと、精神は言葉の奴隷になり、悲しみが始まります」（クリシュナムルティ、2010A、275頁）。

恐怖に関しては、私たちにとって、死への恐怖が最も切実なもののように思われる。

これに関して、クリシュナムルティは、「死ぬという意味はいまから二十年後に死ぬことだけではなく、毎日死ななければいけないということです。技術的なこととはべつに、日々自分の知っているすべてに対してあなたは死ぬ—無頓着になるのです。妻のイメージに無頓着になります。あなたが味わう喜びや苦痛や記憶、経験に、毎日無頓着になるのです。そうでなければそれらに直接触れることはできないのです。もしあなたがそういうことにすっかり無頓着になるなら、恐怖は終わりを告げ、あらゆることが再生されるでしょう」（クリシュナムルティ, 1997, 87 頁）と述べている。

恐怖なしに生きるために、クリシュナムルティが語るメッセージの結論は、次のことと思われる。「認識は心を恐怖から解放しません。ただ恐怖を強めるだけです。ここには二つの要因が作用しています。あなたはその恐怖と自分はべつのものだと感じ、そこで恐怖に働きかけ、制御したり追い払ったり、また理屈をつけたりします。恐怖に対して何かをしているのは、あなたなのです。けれどもそこには「私」と「恐怖」との分離があります。それでその分離の中に対立が生まれるのです。一方あなたが観察するなら、その恐怖はあなたそのもののものです。あなたは恐怖とはべつのものではありません。もし観察するものが観察されるものであり、事実上、観察するものがその恐怖なのだという、この根本原理をひとたび把握すれば、そのとき観察者と恐怖との間の分離はなくなるのです」（クリシュナムルティ, 1997, 120～121 頁）。

生きる哲学ともいえる、このような見方は、容易には理解できないものであるが、次のような広い文脈のなかで、じっくり自分の内面に向きあっていくことが大切と思われる。

「おわかりですか、みなさん。あなたの意識は、あなた以外の人たちの意識でもあるということが。人間はあなたも他の人たちもみな、あらゆる形の困難や苦痛、苦悩、不安、孤独、憂鬱、それに悲しみや喜びを経験しています。すべての人たちがこれをくぐり抜けてゆくのです。世界中のすべての人たちがです。ですから私たちの意識、私たちの存在が、全人類であるということです。それはたしかなことなのです。これほど単純な事実を受け容れることに、私たちはなんと消極的なのでしょうか。というのも私たちは、あまりにも個を主張することに慣れてしまっているからです。—「私は」「私に」が、何よりも先にきます。でもこの素晴らしい地球に暮らす、すべての人間と自分の意識が共有されるものであることを見るなら、生き方ぜんぶが変わるのです。議論や説得や押しつけ、布教などまったく無益です。なぜならあなたは自分自身で、意識が共有されるものであるということを見なければならぬのですから。では——他の人たちでもあり、人類でもある——私たちひとりひとは、このうえなく単純な事実を見ることはできるでしょうか。恐怖の原因が思考＝時間であるということを観察し、見ることはできるでしょうか。もしできるならまさにその知覚が、行動にほかならないのです。そしてその時点から、あなたはだれにもたよりません。そのことを明確に見てください。そこで初めてあなたは、自由な人間になるのです」（クリシュナムルティ, 1997, 216～217 頁）。

2 生きることと死ぬこと

私たちはどのように生きるかという生きる哲学に関わるが、クリシュナムルティは、

次の言葉から窺えるように、生きることと死ぬことを一体とみる体験をしたようである。「自己の本質は死ですが、この死は生の正に本質でもありました。事実、それらは分離していなくて、生と死でした。これは、頭脳の安楽と観念的安全性のために、頭脳によって思い描かれた何かではありませんでした。正に生きることが死ぬことであり、死ぬことが生きることでした」(クリシュナムルティ, 2010A, 96 頁)。

このような体験の有無はともかく、生きるとは死ぬことであるとみることによって、はじめて前節のテーマである「恐怖なしに生きる」ことができると、クリシュナムルティは次のように述べている。「死は生と共にあるのですから、それと共に生きて、毎日生きるように毎日死ぬことです。あらゆる悲慘を、あらゆる快楽を死んでやり過ごすのです。一つを心の奥底にしまい込んだままにしないで、あらゆるものを死んでやり過ごすのです。記憶を、若さを、神々を、救済者たちを、家族をも、死んでやり過ごすのです。あらゆるものに対して傍観者になることです。知っているあらゆるものを、明日にではなく、今日死んでやり過ごすのです。そうすると、死の影である恐怖がなくなり、生と死が別物でないことが分かるでしょう。終わりが始まりなのです。そうすると精神は時間を超えています。恐怖は時間であり、思考が恐怖を生み出します。経験や、記憶や、新旧の伝統などの過去の死によって精神が新しくなり、未知なもの、計り知れないものが現れます」(クリシュナムルティ, 2010A, 383～384 頁)。

恐怖は時間であるというだけでなく、クリシュナムルティは、執着は時間を意味するとして、完全に執着から自由になれるかどうか、死を待つのでなく、今、その執着から自由になれるか、この事実に向きあい、そして生きることが死ぬことだと自分で理解することが大切だとしている(クリシュナムルティ, 1994, 140 頁)。

他の言い方で、同様のことが、以下のように語られている。「私たちの全人生は既知のものの範囲内での運動です。これは明白です。死は、既知のものが終わることです。それは肉体組織が終わること、「私」の中身である記憶が終わることです。「私」は記憶以外の何ものでもなく、そして記憶は既知のものだからです。そこで私はそのすべてを手放すこと、つまり死を恐れるのです」(クリシュナムルティ, 2010B, 202 頁)として、次の問題は「すべてのエネルギー、力、混乱と共に私たちが生きている間に、例えば執着を終わらせることができるだろうか？」と問いかけ、次のように述べている。

「それは、自分の活力、エネルギー、知力、深い感情のすべてと共に生きながら、同時に一定の結論、性癖、経験、執着、傷を終わらせるという意味で死ぬことです。すなわち、生きながら、死と共に生きるのです。そのときには、死はずっと先にある何か、なんらかの事故、病気あるいは老年によって自分の人生の最後にもたらされる何かではなく、記憶のすべてのものごとを終わらせることなのです。すなわち、生きることから離れてあるものではない——生と一体の——死です」(クリシュナムルティ, 2010B, 203～204 頁)。

このようなことを、死が間近な末期癌の病人に、クリシュナムルティは次のように語っている。「あなたはこれができるでしょうか。それとも不可能でしょうか。それは死が「あなたは何も持っていけない」と言う、という意味です。あなたの知識、あなたの書物、あなたの妻と子ども、あなたのお金、あなたの性格、あなたの虚栄、あな

た自身で築き上げてきたすべて——あらゆるものごとは、終わりに死と共に去るのです。あなたは、輪廻転生する可能性があると言うかもしれません。しかし、私はあなたに尋ねているのです——あなたは、何にも最小の執着もなく、今生きることができるのでしょうか。なぜこれを——すなわち執着を——病床まで先送りするのでしょうか。今執着から自由でありなさい」(クリシュナムルティ, 2010C, 69 頁)。

このように、クリシュナムルティは、「死への恐怖」を終わらせるためには、執着などを終わらせるという意味で死に、生きながら死とともに生きることによって、未知なもの、計り知れないものが現れるという。これに関し、『回想のクリシュナムルティ』の著者であるイーリン・ブローは、このテーマに関し、クリシュナムルティの言葉を取りあげている。つまり「どのように日常生活を生きたいのでしょうか？」という質問に、クリシュナムルティは、「もしあなたの余命が一時間しかなかったら、どうなさるだろう？あなたは俗事等々を整理し…家族や友人たちに許しを乞い、…そして彼らを許すのではないだろうか？あなたは精神のものごと、願望、そして世界に対して完全に死ぬのではないだろうか？そしてもしそれを一時間実行できるなら、その時にはこれから何日でも何年でもそれを実行できるのではないだろうか？——『生と覚醒のコメンタリー』と答えている(ブロー, 131 頁)。

そして、「生きている間に死ぬということはどういう意味か」について語るクリシュナムルティの次の言葉をみてみよう。それは、私たちが「死への恐怖」から自由になる究極のメッセージのように思われるので、以下に掲記し、重ねて強調しておこう。

「死ぬとはどういう意味でしょうか？それはあらゆるものを放棄することです。死は、非常に鋭利なカミソリで、あなたが執着しているもの、あなたの神々、あなたの迷信、あなたを慰めてくれるもの、来世への信心、等々からあなたを切り離します。私が死が何を意味するかを見出そうとしているのは、それが生きることと同じくらい重要だからです。では、どうしたら私は死が何を意味するかを、理論的にではなく、実際に見出すことができるのでしょうか？私はそれを実際に見出したいのであり、皆さんにもそうしてほしいのです。死とは何を意味しているのでしょうか？その質問を皆さん自身に向けてごらんください。私たちが若いころであろうと、非常に高齢になってからであろうと、この問題は常にすぐそばにあります。それは、人間——私やあなた——が作り出してきたものから完全に自由であること、それらにまったく執着しないことを意味しているのではないのでしょうか？いかなる執着物、いかなる神、いかなる未来、いかなる過去からも自由であること。生きていながら死ぬということ——その美しさ、その偉大さ、そのとてつもない力を見てご覧なさい。それが何を意味しているかわかりますか？生きていながら毎瞬毎瞬あなたは死んでいるので、一生の間中ずっとあなたは何ものにも執着しない——それが死というものの意味なのです」(ブロー, 365 頁)。

3 全的な意識変容

クリシュナムルティは、外面的な対応よりも、内面的な変化を強調して、「革命は社会的であろうと経済的であろうと、ただ外面的な状態や物事を、範囲を拡大して、或いは縮小して変えているだけで、いつも思考の限られた領域の中の出来事にすぎないで

しょう。余すことのない革命のためには、頭脳が、権威や嫉妬や恐怖など、それ自身の秘かな内面の仕組みを捨て去ってしまわなければならないのです」(クリシュナムルティ, 2010A, 15 頁) という。

外面的な圧力となるコントロールに関しても、クリシュナムルティは、「コントロールは、どんな形であれ、余すことなく理解するための障害になります。規律化された生は、順応を宗とする生き方で、順応の中には恐怖からの自由がありません。習慣は自由を破壊し、考え方の癖や飲酒癖などは表層的で、鈍重な生き方を助長します。信仰や教条や儀式などを伴う組織化された宗教は、精神の壮大な広がりへ入っていくことを否定します。精神の壮大な広がりへ入っていくことこそが、頭脳から時空を洗い流します。頭脳から時空が洗い流されるので、頭脳は時空を扱うことができます」(クリシュナムルティ, 2010A, 19 頁) と述べている。

つまり、クリシュナムルティは、外面的な対応である経済的また社会的革命は、根本的な変化でないと、次のように強調している。「人は何と僅かしか変わらないのでしよう。人は、内的そして外的な、ある種の強制や圧力で変わりますが、それは実際には適応です。何らかの影響や言葉や態度が、人の習慣的なパターンを変えますが、それは大した変化ではありません。プロパガンダや新聞や事件が、ある程度、人の生き方の方向を変えます。恐怖と見返りが思考的な習慣を破りますが、それは他のパターンに形を変えるだけです。新しい発明や、新しい野望、新しい信仰が、ある種の変化を生みます。しかし、それらは水面上の強い風のようにすべて表面上だけであって、根本的でもなければ、深くもなく、破壊的でもありません。動機に基づいて起こる全ての変化は、決して変化ではありません。経済的社会的革命は反射的な反応です。反射的な反応によって生み出される全ての変化は、根本的な変化ではありません。それはパターンの中の変化にしか過ぎません。そのような変化は単に適応であり、安楽や安全を願う機械的な行動であり、物理的な生き残りです」(クリシュナムルティ, 2010A, 158 頁)。

それでは根本的な変化をもたらすにはどうしたらいいかという問題に、クリシュナムルティは、全的な意識変容が大切としている。全的な意識変容のためには、まず「人間の意識はひとつの全体であり、あなたの意識でも私の意識でもなく、それは人類の意識である」ことを理解する必要があるという。そして「自分の意識は人類の意識であり、それゆえ自分は人間の意識に対して全面的に責任があることを悟れば、そのときにはその意識からの自由がとてつもなく重要になり、死はまったく異なった意味をもつことになる」と、次のように述べている。

「私は、人類全部の生を生きていくのです。そしてもし私が死を理解し、悲しみを理解して、それを終わらせれば、私は人類の意識全部を浄化しつつあるのです。おわかりですか？それだからこそ、死の意味を理解することが重要なのです。そしておそらく、死は大きな意義をもち、愛と深い関係にあるのです。なぜなら、皆さんがあることを終わらせると、そこに愛があるからです。すなわち、執着を完全に終わらせると、そこに愛があるのです」(クリシュナムルティ, 2010B, 17 頁, 141～143 頁)。

このような見方をより明確に理解するために、前にとりあげたイーブリン・ブローの著作の関連箇所をみてみよう。クリシュナムルティは、1948 年 4 月 3 日に、ボン

ベイからの全インド向けラジオ放送で次のように語っている。

「平和の道は単純です。それは真理と愛の道です。それはわれわれ個々人から始まるのです。個人が戦争と暴力への責任を引き受ける時、平和はその足場を見出すのです。遠くまで行くには、近くから始めなければならず、そしてその最初の行為は内面にあるのです。平和の起点はわれわれの外部にあるのではなく、人間の心の中に保たれているのです。平和を実現するためには、まずわれわれが内面的に平和でなければなりません。暴力を終らせるためには、われわれ一人ひとりがわれわれ自身を暴力の原因から自発的に自由にしなければなりません。入念にわれわれは自己変容という仕事に取り組まなければならないのです。われわれは、自分の精神と心をシンプルにし、創造的に空っぽにさせて、注意深くしなければなりません。その時にのみ愛が起こりうるのです。そして愛のみが世界に平和をもたらすことができ、その時にのみ世界は真実なるものの祝福を知ることでしょう。これが平和の道です」（ブロー、63 頁）。

また 1949 年のロンドン講話（第 5 回）では、「われわれは世の中に変化——経済的変化、社会的変化——を引き起こすことを望んでいます、しかし根源的な心理的革命、変容がないかぎり、われわれは実は意義深い外面的変化をもたらすことはできないと私には思われるのです」と語り、1948 年のボンベイ講話（第 3 回）では、「われわれは立法、外面的革命、方式による変容を望んでいます、内面的には依然として変容していません。内面的にわれわれは動揺し、混乱しています。内面的に秩序、平和、幸福をもたらさないかぎり、われわれは世界に平和と幸福をもたらすことはできないのです」（ブロー、124 頁）と語っている。

要するに、今日の危機的な状況に対して、私たちが内面的に変容しないかぎり、私たちの社会に幸福と平和をもたらせないし、私たちが全的に意識変容することによってはじめて、「自由に幸福に、そして愛と平和に生きる」ことができるのである。

4 思考と時間と意識を超えられるか —哲学の根源的問題—

クリシュナムルティの思想にとって、理解が極めて難しいところの一つは、思考と時間と意識に対する見方であろう。クリシュナムルティは、思考と時間と意識を超えることを説いているが、その意味を理解するために、先ず思考の捉え方から、そのポイントをみてみよう。

「経験は有限です。ですから、知識もどんどん追加されていったとしても、現在、未来において、有限です。科学的知識はそのことに基づいています。知識は、それが現在のものであっても未来のものであっても、つねに有限です。そのため、記憶は有限なのです。ですから思考も有限です。…では、思考は秩序をもたらすことができるのでしょうか。というのも、有限な思考そのものが無秩序の源かもしれないからです。あなたがこのことを把握したかどうか。私の質問がわかりますか。とても興味深い問題です。追究しなさい。有限なものは何であろうと、無秩序を生み出すに違いありません。…私たちは人間として何百万年も暴力、無秩序、葛藤の中に生きてきました。しかも、そのすべては思考によってもたらされています。そのすべてがです。そこで、人は追究し始めます——思考と同じように、活動的で、明確で、正確で、エネルギーのある何か別なものはないかと。K（クリシュナムルティ）は昔、思考は有限だと言

うことを発見しました。誰かに教えられたわけではありません」(クリシュナムルティ, 1994, 68～69 頁)。

要するに、知識は経験という有限なものに基づいており、思考は知識に基づいた記憶なので、経験も知識も記憶も、それに思考も有限となること、思考は有限なるがゆえに無秩序を生み出すこと、感覚は思考の奴隷であり、思考が感覚からイメージを作り出す瞬間に欲望が生まれること、このような思考を中核とする有限の連鎖を超えなければ、無秩序にとどまり、秩序を生み出せないということになる。

前節で「生きることと死ぬこと」について取りあげたが、それとの関わりも含めて、次に思考と時間と死とのつながりをみてみよう。クリシュナムルティは、次のように時間と思考と死は一つのものとなししている。

「時間は希望を与え、思考は慰めを与え、思考は継続を保証します。ですから私たちは、「さて、来世では…」と言うのです。けれども、もし自分がこのばかばかしさ、愚かさ、幻想などといったことを今終わらせなければ、それは来世でもあるでしょう——もし来世があるならですが。こうして、時間や思考が継続をもたらし、私たちはその継続にしがみつくのです。そして、それによって恐怖が生まれるのです。しかも、恐怖は愛を破壊します。愛、慈悲、死を。それは別々の動きではありません。そこで、尋ねているのです——死と共に生きることが出来ますか。そして、思考と時間は終わるのでしょうか。すべてが関連しています。時間と思考と死を別々のものにしないでください。それはみな一つのものなのです」(クリシュナムルティ, 1994, 202～203 頁)。

このような時間と思考と死の中で、人間の脳は数百万年の間進化してきたとし、クリシュナムルティは、「進化とは、連続した時からなる出来事の全体ではないでしょうか。すべての宗教的儀式を作り上げるには、時間が必要です。それゆえに、脳は条件づけられ、脳そのものの意志の働きで限定され、自らの安全を求めたり、自らの縄張りには固執したりして、「信じる」「信じない」、「賛成」「反対」、「これが私の意見」「これが私の判断」と言うのです——これは利己心です。たとえ聖職者のヒエラルキーにおいてであろうと、さまざまな著名な政治家、財力によって権力を求める人、驚くほど学識のある教授、善や平和やその他もろもろのことについて説く導師においてであろうと、それは利己心の一部です。このすべてと向き合ってください」という(クリシュナムルティ, 1994, 207 頁)。

現在、人間の脳は退化しつつあるようにみられるが、これに関して、クリシュナムルティは、次のように語っている。「もし脳が完全に自由でなければ、それは退化していくことでしょう。なぜなら、それが問題、専門化、生計を立てること等々でいっぱいときは、それは活動していますが、コンピュータがそうした活動を引き継げば、脳はますます問題をもつことがわずかになり、それゆえ徐々に退化していくからです。それが現に起こっているのです。それは未来のことではなく、今実際に起こっているのです。皆さんが自分自身の活動を観察すれば、おわかりのはずです」(クリシュナムルティ, 2010B, 105～106 頁)。ここで重要なことは、「あなたの脳はあなただけのものではありません。それは、あらゆる種類の経験や知識を蓄えながら、何百万年もの間成長してきたのです。それはあなただけのものではないのです。あなたの意識はあ

なただけのものではありません。あなたの脳はあなただけのものではないと言われると、かなり抵抗を感じるのではないのでしょうか？時間と空間を通じて成長してきたそれは、全人類に共通なのです」（クリシュナムルティ、2010B, 156 頁）というクリシュナムルティの指摘である。

私たちの脳は全人類に共通なのだから、論争し、意見や判断をぶつけあっていくのではなく、「一緒に (together)」、世界がどうなっているかを観察することが大切だとクリシュナムルティはいう。「一緒に考える」ということによって意味しているのは、単に相手の意見や評価を鵜呑みにしたりせず、外の世界で起こっていることだけでなく、私たち全員の内で、心理的に起こっていることも一緒に観察するということだとされる（クリシュナムルティ、2010B, 170～171 頁）。私は、環境マネジメントと意識マネジメントは硬貨の裏表として、この両面を含むホリスティック・マネジメントをめざしているので、意識に対するクリシュナムルティの次の見方は、大きな示唆となる。

「危機は、経済の世界にも、政治の世界にもありません。それは意識の中にあるのです。が、私たちのうちごくわずかしはこのことに気づいていないように思われます。危機は私たちの精神の中、心の中に、すなわち意識の中にあるのです。私たちの意識は私たちの存在全体を含んでいます。それは私たちのすべての信念、結論、愛国心、恐怖心、快楽の追求、一見して解決不可能な問題、さらには愛、慈悲心と呼ばれているものを含んでいます。また、それは死の問題、あの世には何があるのか、時間や思考の彼方には何があるのか、永遠に続くものはあるのかといった憶測も含んでいます。そういったすべてが意識の中身を成しているのです。それが人間がどこに住んでいようと、あらゆる人間の意識の中身なのです。この意識の中身は全人類の共通の基盤です。このことをまず初めに非常にはっきりと認めておかねばなりません」（クリシュナムルティ、2010B, 172 頁）。

その上で、「私たちが自分の意識は人類の意識であり、問題はすべて自分の意識の中にあることを実際に見るときは、自分はグルでありかつ弟子であること、教師でありかつ生徒であることを悟るからです。これはとてつもなく深い悟りです。ですから、私たちが自分自身を深く理解するにつれて、私たちは自分自身にとっての光になり、他の誰にも、いかなる本にも、話し手のそれを含むいかなる権威にも頼らなくなるのです。こうして私たちは、自分自身にとっての光となって、生きることに伴うすべての問題を理解できるようになる」（クリシュナムルティ、2010B, 181 頁）という。

これ迄思考と意識についてみてきたが、クリシュナムルティは、「全ての意識は思考です。表現されていても表現されていなくても、言葉であつても言葉を探していても、それは思考です」（クリシュナムルティ、2010A, 81 頁）と述べている。このことを踏まえた上で、「思考者は思考である」という、クリシュナムルティの思想の難解であるが重要なメッセージを取りあげよう。

「私たちは、制御者は制御されるものだという事実を学ばなければなりません。制御者、思考者、経験者は、制御されるもの、思考の運動、経験とは違うと私たちは思っています。が、もし私たちが仔細に観察してみれば、思考者はすなわち思考であることがわかるでしょう。思考は、思考とは別にあるものとしての思考者を作り上げ、

そして今度はその思考者が「私は制御しなければならない」と言うのです。ですから制御者は制御されるものであるということを皆さんが見抜くとき、皆さんは葛藤をすっかり免れるのです。葛藤は両者の区別がある時にのみ存在するからです。観察者、目撃者、経験者と、彼が観察し、目撃し、経験するものとの間に区別があるとき、必然的に葛藤が生じます。私たちの人生が葛藤の連続なのは、私たちがこの区別とともに生きているからです。が、この区別は虚構であり、本当ではありません…ですから、その事実、制御者は制御されるものと同じであり、思考者は思考であるという事実、言葉の上でも、観念としてでも、苦勞して到達すべきユートピア的状态としてでもなく、実際に自分自身の人生の中で気づくとき、私たちの思考パターンはそっくり根本的变化を遂げ、いかなる葛藤もなくなるのです」(クリシュナムルティ, 2010B, 211～212 頁)。

結びに

クリシュナムルティは、1895年にインド、マドラスの近郊で生まれ、1986年2月17日早朝に、カリフォルニアのオーハイ峡谷で逝去した。クリシュナムルティは、友人や追従者たちによってクリシュナジ (Krishnaji) とインド的に呼ばれたり (接尾辞の “ji” は親愛な敬意を示している)、自分自身を「K」として言及していた (ルティエンス, 104 頁)。呼称はともかく、クリシュナムルティは、当時国際的に著名であったにもかかわらず、現在アカデミックな分野ではほとんど知られておらず、比較的マイナーなスピリチュアル系統の分野でもシュタイナーほどに注目されることもなく、知る人ぞ知るといふ存在となっている。クリシュナムルティは、人類史上比類なき思想家であることを思えば、なんとも言えないはがゆい気持になる。地球環境の危機を乗り切るのに、太陽エネルギーを使う時機であるのと同じように、今こそ人類の危機を乗り切るのに、クリシュナムルティの思想に向きあう時機と思われてならない。そこで以下では、幾つかの角度から、クリシュナムルティの思想を補足的にみてみよう。

まず、クリシュナムルティは、宗教のように人々を特定の方向へ導こうとしていないことである。「私はあなた方の松葉杖であることを拒みます。私は、あなた方の崇拜のために檻の中に入れられるつもりはありません。あなた方が山の新鮮な空気を運んできて、それを小さな部屋の中に閉じ込める時、その空気の新鮮さは消失させて淀んでしまうのです。…私は、神はいないとは一度も言いませんでした。私は、あなた方の中に顕現したものとしての神だけがあると言ったのです——が、私は〈神 God〉という言葉を使いたくはありません。…私はむしろそれを〈生 Life〉と呼ぶ方を好みます」として、「私の唯一の関心は、人間を絶対的に、無条件に自由にするることなのです」と述べている (クリシュナムルティ, 2007, 123, 132 頁)。

だから「自由」ということがクリシュナムルティにとって、究極的なものになろう。それは、「人間にとっての根本問題は、彼がアメリカにしようと、インドにしようと、ロシアにしようと、他のどこにしようと、「小さな片隅」から自由になれるかどうかなのです。そしてその小さな片隅とは私たち自身であり、あなた方の安物のちっぽけな精神なのです」として、「あなたの中には人類の物語が書き込まれているのです。もしあなたが本当にそれを見れば、それはあなたにとてつもない活力、エネルギー、美、

愛を与えます。なぜなら、その時にはあなたは、地球のどこかの隅っこで悪戦苦闘しているちっぽけな存在ではなくなるからです。あなたはこの全人類の一部になるのです」と語っている（大野, 116, 212 頁）。まさに自由であるときに、私の意識と人類の意識との一体感が得られるのであろう。

次にクリシュナムルティは、全的な意識変容を強調して、クリシュナムルティの学校の教師たちに、「どんな手段をとおして、どんな種類の態度、どんな種類の言語的な説明をとおして、生徒たちに全体調和的な生き方の教育をするのか」と問いかけ、自分のいう全体調和的 (holistic) とは全体的 (whole)、(無傷の) 壊れていないという意味だとしている（クリシュナムルティ, 2010C, 212 頁）。またクリシュナムルティが、「科学における創造性」というテーマで、ニューメキシコ州ロスアラモスの国立原子力研究センターで約 700 名の科学者に語ったときの結びの言葉を、ルティエンスは取りあげている。

「間違いなく、創造は思考が静まっている時にのみ起こりうるのです。…科学は、次々により多くの知識を蓄積していく運動です。「より多く」は測定であり、そして思考は物質的過程なので、測定されうるのです。知識はそれ自体の限られた洞察、それ自体の限られた創造性を備えていますが、しかしそれは葛藤をもたらします。私たちが話しているのはホリスティックな洞察、その中にエゴ、「ミー」、パーソナリティが少しも入り込んでいない、そういう洞察のことです。それがあつた時にのみ、この創造性と呼ばれているものがあるのです。おわかりでしょうか」（ルティエンス, 306 頁）。

ここで“ホリスティック”とは、外面と内面をすべて含んだ全体の調和のように思われる。クリシュナムルティが、「心の秩序とは全体にバランスのとれた状態であり、それを維持するためにはまず機敏で敏捷な身体を持つことが必要です。身体状態が精神（心）状態に影響を与えるからです。それから、脳ひいては精神の全部に秩序がなければなりません」（大野, 166 頁）というように、外面だけでなく内面も含めて全体の調和がとれた時に秩序が生まれるように思われる。なお、クリシュナムルティは、一つからもう一つに、これからあれに、という観念的な意味での変容 (transformation) でなく、生をほんとうに変える意味での変異 (mutation) が起こることを説いていることを付言しておこう（クリシュナムルティ, 2010C, 260～261 頁）。

クリシュナムルティは理論や観念でなく、実践することが大切とする。実際、過去に執着しないよう説いた彼自身、過去の記憶をほぼ完全に失ったようである。ルティエンスは、クリシュナムルティが過去の記憶をほぼ完全に失ったのは、「記憶は、実際的な目的のため以外は、当日から翌日へと持ち越されるべきではない重荷だという、彼の後の教えと一致していた」と指摘している（ルティエンス, 139 頁）。

ルティエンスは、クリシュナムルティが「知識は精神を腐敗させます。知識は過去の運動であり、そして過去が現にあるもの（現在）を曇らせる時、腐敗が起こるのです。…私たちは腐敗物という言葉、ばらばらになったもの、一つの全体としてまとまっていないものという意味で使っているのです」と語ったことも紹介している（ルティエンス, 264 頁）。私も 1991 年に東洋大学で開催された日本記号学会第 11 回大会のシンポジウムで、「研究論文の生産とあいまって、廃棄物としての研究論文の蓄積が同時進行している現在、ゴミとしての知識を処理・選別もしくはチェックする見識こ

そが問われている」と話したことがあり（石井, 1992, 124 頁）、改めてその意味の深さを感じている。

イーブリン・ブローの『回想のクリシュナムルティ第1部』の訳者あとがきで、「クリシュナムルティは、クリシュナムルティ財団のものでも神智学協会のものでもありません。賢者は賢者です。彼は全世界のもので」として、次のベサント夫人の言葉が紹介されている。「神智学的探求を志すすべての学徒が理解しなければならないことは、すべてを受け入れる盲目的な軽信も、すべてを拒絶する等しく盲目的な猜疑心も、ともに避けねばならないということです」（ブロー, 2009, 320 頁）。私自身、大学の「環境マネジメント」の講義では、意識マネジメントの領域に踏み込む際に常に、“無条件に受け入れるのは危険であり、また無条件に拒否するのは賢明でない”ことを強調しているので、ベサント夫人の言葉には共感するばかりである。

ただベサント夫人の同僚で神智学徒として著名なルドルフ・シュタイナーは、当時少年のクリシュナムルティを何らかの霊的重要性を持った存在として認めることを拒み、神智学協会を離脱し、彼自身の協会「人智学協会」を結成したことは（ブロー, 2009, 53 頁）、私にとって大きな衝撃である。クリシュナムルティとシュタイナーは、スピリチュアルな分野でお互い稀有の存在同士なのに、何故共に支えあえなかったのかと、複雑な思いにかられる。クリシュナムルティに比してシュタイナーの方が、現在、教育、芸術などの分野で、より一般に浸透しているようにみうけられるが、それはともかく両者には根本的なところで、妥協できない差異があるようにも思われる。ここではそれに立ち入る余裕はないが、その差異が、私自身、シュタイナーよりもクリシュナムルティに魅かれる源泉であろうと感じている。

クリシュナムルティの思想は、極端な主張のように受けとられかねないが、たとえば、「われわれの誰もまだ完成に至っていないのですから、もしわれわれが現段階で無欲にならなければならない、自分のすべての欲望を根絶させねばならないという考えを持てば、われわれは無気力になり、衰弱し、われわれを駆り立てる意志をなくしてしまうでしょう。ですからわれわれは欲望を、たとえ、たまたまそれらが当座は良くない種類のものであっても、持たねばならないのです。が、欲望がより気高くなり、より純粋になっていくにつれて、人生に対するわれわれの態度もより気高くなっていくでしょう」と、現段階では無欲にならなくてもよいと語っていることが、イーブリン・ブローによって紹介されている（ブロー, 2009, 124 頁）。またクリシュナムルティは、「常識」を持つことの重要性についても、「何らかの言明を聞く時、それを言ったのが誰であれ、それを受け入れる際にはかならず常識を働かせ、自分自身の判断をしなければならない、けっして鵜呑みにしたり、盲従したりしてはならない」と語っていることも、ブローによって紹介されている。このようにクリシュナムルティは、バランス感覚をもって日常生活を生きるように説いていることを理解しておきたい。

最後にクリシュナムルティの思想は、地球環境の危機と人類の危機の今、私たちにどう生きるかということに向きあわせる、比類なき哲学であることを強調し訴えておきたい。クリシュナムルティも、「巷のあらゆる哲学は理知的なものであり、したがって部分的なものでしかありません。しかし、人間はそうした哲学の虜となってきました。哲学は社会のあるべき姿に関する概念を発明し、概念によって人間を犠牲にして

きました——いわゆる思想家たちが唱える理想によって、人間性が奪いとられてきたのです」(クリシュナムルティ, 2010D, 89 頁)と指摘している。

クリシュナムルティの思想に依拠して、今日の人類の危機に私たちはどう生きるかという問いに向きあい、一人ひとり独力で、自らの生き方となる「生きる哲学」を見いだそう。その際、私たちは、外面だけでなく内面に向かい、全的な意識変容を実践したい。私たちがどんな場においても、私と人類は一体だと感じよう。マネジメントも医療も学問も哲学も、あらゆる分野で、すべては人間の自由と幸福につながるように実践したい。そのことが自ずと愛溢れる平和な社会につながることになる。私たちが自らの内面に向きあい、それぞれの持ち場で、人間が自由と幸福であるように生き、愛溢れる平和な社会を実現することが、地球環境時代を生きる哲学として、今一人ひとりに問われているのではないだろうか。

参考文献

- クリシュナムルティ, J. (1994)、ギーブル恭子訳『ザーネンのクリシュナムルティ』平河出版社。
- クリシュナムルティ, J. (1997)、有為エンジェル訳『恐怖なしに生きる』平河出版社。
- クリシュナムルティ, J. (2010A)、中野多一郎訳『クリシュナムルティ・ノート〈拡大完全版〉』たま出版。
- クリシュナムルティ, J. (2010B)、神咲禮監修・大野純一監訳・渡辺充訳『英知へのターニングポイント—思考のネットワークを越えて—』彩雲出版。
- クリシュナムルティ, J. (2010C)、小早川詔・藤仲好司訳『明日が変わるとき—クリシュナムルティ最後の講話』、UNIO。
- クリシュナムルティ, J. (2010D)、小林真行訳『アートとしての教育: クリシュナムルティ書簡集』(有)コスモス・ライブラリー。
- ルティエンス、メアリー (2007)、大野純一訳『クリシュナムルティの生と死』(有)コスモス・ライブラリー。
- ブロー、イーリン (2009)、大野純一訳『回想のクリシュナムルティ第1部: 最初的一步…』(有)コスモス・ライブラリー。
- ブロー、イーリン (2010)、大野純一訳『回想のクリシュナムルティ第2部: 最後的一步…』(有)コスモス・ライブラリー。
- 大野純一著編訳 (2004)、『片隅からの自由—クリシュナムルティに学ぶ』コスモス・ライブラリー。
- 石井薫 (2011)「ホリスティック・マネジメントの哲学探究—クリシュナムルティの思想に依拠して— (1)」『経営論集』77号、東洋大学。
- 石井薫 (2010)「自由の哲学—クリシュナムルティの世界に触れて— (1) (2)」『地球マネジメント学会通信』第91号 (1) 2010年6月、第92号 (2) 2010年8月。
- 北原貞輔・石井薫共編著 (1994)『自然を捨てた日本人』東海大学出版会。
- 日本記号学会編 (1992)『ポストモダンの記号論 (記号学研究 12)』東海大学出版会 (石井薫「記号分野と監査分野との相互浸透」、119～131頁)。

(2012年12月18日受理)